

平成 27 年 1 月 29 日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 島根県教育委員会

所 在 地 島根県松江市殿町 1 番地

代表者職氏名 教育長 藤原孝行

平成 26 年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成 27 年 3 月 31 日

2. 強化地域拠点の学校名

ふりがな	しまねけんりつみとやこうとうがっこう	ふりがな	おんだ よしお
学校名	島根県立三刀屋高等学校	校長名	恩田佳雄
ふりがな	うなんしりつよしだちゅうがっこう	ふりがな	かつべ ゆきお
学校名	雲南市立吉田中学校	校長名	勝部由紀夫
ふりがな	うなんしりつよしだしょうがっこう	ふりがな	みしま あきら
学校名	雲南市立吉田小学校	校長名	三嶋亮
ふりがな	うなんしりつたいしょうがっこう	ふりがな	すぎたに まなぶ
学校名	雲南市立田井小学校	校長名	杉谷学

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

- 複式学級における外国語活動及び英語科の教育課程、指導方法、評価方法並びに教員研修の在り方。
- 小学校英語科と円滑に接続し、小規模学級の特色を生かして着実な定着を図る中・高等学校の教育課程等の在り方。

(2) 研究の概要

文部科学省の調査によれば、平成 22 年度の全国の小学校における複式学級は 5,804 学級（児童数 47,285 人）にのぼる。本県においては全小学校の 3 分の 1 を超える学校が複式学級を有しており、複式学級における指導方法等の研究は重要な課題となっている。現在、複式学級における外国語活動では、2 ヶ年の指導単元の組み替え等によって対応しているが、他の教科等ほど指導方法が確立されていない状況である。英語教育の早期化に伴い、初めて英語と出会う学年が小学校第 3 学年になること、高学年の教科化により小学校修了時に求められる英語力を保障する必

要があること等を勘案すると、複式学級における英語指導はこれまで以上に大きな課題となることが予想される。これらのことから、本研究では、異学年の児童が同時に存在する少人数の学級においても、コミュニケーション能力の素地や初歩的な英語力を養うことができる複式学級の教育課程や指導方法等の開発に取り組む。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

<現状の分析>

本拠点の小学校2校はいずれも全校児童30名前後の小規模校で、第3・4学年及び第5・6学年はともに複式学級である。5年生と6年生がそれぞれ数人しかおらず、言語活動を中心に進める外国語活動においては、一人の担任による学年別指導は困難である。使用教材の2ヵ年の単元を組み替えながら、5・6年生が一緒に行える学習活動を工夫しているものの、年間指導計画の作成は大きな課題となっている。

小規模であることから、授業では児童一人一人が英語を口にする機会は多く、ほとんどの児童が活動に対して積極的に取り組む。担任も一人一人の活動状況を見取りやすく、きめ細かな指導が可能である。しかし、人間関係が限られていることから、児童相互の新たな発見や気づきを促す相手意識のあるコミュニケーション活動の設定が難しく、コミュニケーション能力の素地を養ううえで重要な「人との関わりへの興味・関心・意欲」の向上につながりにくい面がある。

教員間の関係は小規模校ならではの強さがあり、全教職員で児童を育てようとする気運が高い。その結束力は自校内にとどまらず、本拠点の小学校2校が連携を図り、両校の教員による合同学習等も頻繁に行われている。また、小・中・高等学校の連携も密である。本拠点の研究校は、学校教育に対する関心や理解の高い地域にあり、学校参観等における保護者の参加率は、両小学校ともにほぼ100%である。雲南市が掲げる「ふるさとを愛し、心豊かでたくましく、未来を切り拓く、雲南市の人づくり」という教育基本目標のもと、学校・保護者・地域・教育委員会が一丸となっており、地域住民も「支援ボランティア」として日常的に学校教育に関わるなど、学校教育への協力が得やすい環境にある。

雲南市教育委員会は、教育基本目標実現の施策として独自のキャリア教育推進プログラムを策定しているが、未来を切り拓く児童生徒の育成のために、グローバル社会に対応する力の育成を重視し、ふるさとの良さを世界に発信する「さくら英語スピーチコンテスト」を小中学生を対象に開催するなど、英語教育には特に力を注いでいる。

<研究の目的>

「ふるさとを愛し、その良さを広く世界に発信しようとする意欲とコミュニケーション能力の基礎を身に付け、グローバル社会に向けて自らの生き方を切り拓いていこうとする心情や態度を養う英語教育の在り方を探る」 ～複式学級及び小規模校での実践を中心に～

○具体目標

I 複式学級における第3・4学年の外国語活動及び第5・6学年の英語科について、次のことを明らかにする。

- ・適切な教育課程と年間指導計画、評価の在り方
- ・各学年の発達段階に応じた適切な指導方法と教材の在り方

- ・全教職員で取り組む指導体制の確立と教職員研修の在り方

II 地域の教育力と小規模校の良さを生かした英語教育を推進するため、次のことに取り組む。

- ・小・中・高等学校英語教育強化推進研究会による英語教育の充実及び中・高等学校における新たな英語科教育課程の編成と小・中・高等学校の教育課程を俯瞰した「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の設定。
- ・他校との交流や地域人材等を活用した、相手意識のある言語活動の実践。
- ・地域の伝統や文化、歴史等、地域教材を活用した英語教育の工夫及びALTを活用した教材化。
- ・ALTとのティームティーチングを効率化する指導案、打合せ時間等の設定と、ALTへの授業のための日本語研修の実施。
- ・地域の小中学生英語スピーチコンテストを活用した小中学校英語科の指導連携。
- ・英語学習のモチベーション向上の取組。

②研究仮説

次に示す取組等の推進により、児童生徒がふるさとを愛し、その良さを広く世界に発信しようとする意欲とコミュニケーション能力の基礎を身に付け、グローバル社会に向けて自らの生き方を切り拓いていこうとする心情や態度を養うことができると考える。

I 複式学級における第3・4学年の外国語活動及び第5・6学年の英語科について

- 複式学級の第3・4学年の外国語活動では、ALT等を活用し、英語との初めての出会いを大切にした導入を行い、発達段階を十分考慮しながら、主としてナーサリータイム等の歌遊びや言葉遊び、ゲーム等の教材による指導を通して英語教育の素地を養う。
- 下学年と上学年の学習内容や達成目標、評価規準等を区別化して、それぞれの学年の発達段階に応じた年間指導計画を作成する。
- 学習活動において下学年と上学年の役割分担を設定し、上学年が2年目の成長を確認できる活動を設定する。
- 第5・6学年修了時の英語力を、中学校との接続を意識した「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標により明確にするとともに、A・B年度の年間指導計画の各単元のねらいを具体化する。
- 教育課程の編成にあたっては、特別支援教育の視点を大切にし、児童の「困り感」に寄り添うことができる支援方法、配慮事項等についても検討する。
- 全教職員による外国語活動等授業研究の設定、職員会議時のミニ研修等、教職員が研修する機会を確保するとともに、全教職員で教材等の作成や管理にあたる。
- ALTとのティームティーチングを効果的に行えるよう、指導案作成や事前打ち合わせ等のシステムを構築する。

II 地域の教育力と小規模校の良さを生かした英語教育を推進する

- 小・中・高等学校の英語教育の在り方を俯瞰する小・中・高等学校英語教育強化推進研究会を設置し、小学校3年生～高等学校3年生までの「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を策定する。
- 小学校の英語科を踏まえ、中・高等学校において、これまでより高度化した教育課程を編成する。

- 他校の児童や地域の人材、海外の人々等との交流を活用した言語活動を取り入れ、コミュニケーションへの関心・意欲・態度を育てる。
- 地域の伝統や文化、歴史と関連させて、地域の良さを発信する活動を取り入れるとともに、ALTによる教材化を図る。
- 担任が授業をすることを前提にしたALT研修を実施し、指導案の様式や打合せ方法について検討するとともに、授業のための日本語研修を行う。
- ALTやICT等の活用や、雲南省の米国交流事業、小中学生英語スピーチコンテスト等の活用により、英語学習へのモチベーションを向上させる。

③研究成果の評価方法

次の評価資料を収集・分析して、研究成果を検証し、改善につなげる。

- 児童生徒への意識調査の定量的分析
- 学校評価の活用による指導者、保護者、地域の意識等の把握
- 運営指導委員による評価
- 児童英検学校版、英語検定等の外部検定試験を活用した児童生徒の英語力の状況
- スピーチコンテスト、国際交流事業への参加状況

(4) 研究開発型

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次	第二年次	第三年次	第四年次
①小学校 外国語活動型	第3・4学年 1コマ 第5・6学年 1コマ	第3・4学年 1コマ	第3・4学年 2コマ (内モジュール1も 検討)	第3・4学年 2コマ (内モジュール1 も検討)
②小学校 教科型	第5・6学年 0コマ	第5・6学年 2コマ	第5・6学年 2コマ (内モジュール1も 検討)	第5・6学年 3コマ (内モジュール1 も検討)

(5) 研究計画（平成26年度の進捗状況・課題）

I 研究計画

<第1年次>

1 全体計画

(1) 組織整備

○校内及び拠点地域の組織整備

- ・雲南省教育研究会英語部会との連携
- ・吉田中学校区小・中・高等学校英語教育強化推進研究会の設置
- ・上記研究会に、授業研究部・教材研究部・小中高地域連携部及びALT研究部を置き、後述の計画に取り組む。

(2) 環境整備【教材研究部】

○教室環境整備

- ・英語ルーム等の整備（掲示物、辞書、英語絵本、音声教材等）

○教材ライブラリーの設置

- ・パソコンによる教材、教具の共有化のためのシステム構築
- ・ALTによる管理及び教材作成

○指導用教材の選定、作成

- ・市販教材の研究
- ・Hi, friends!の活用方法研究
- ・オリジナル教材の作成

(3) 先進的な取組の情報収集【主として授業研究部】

○先進地視察

- ・直島小学校、広島大学附属小学校等への視察
- ・教育課程、年間指導計画、指導教材等の収集
- ・視察結果伝達講習会の実施

○諸外国の英語教育教材等の収集（ALT、CIR）

- ・ALTによる諸外国の英語教育教材、指導法等について情報収集
- ・諸外国との交流活動のための連絡調整

(4) カリキュラム開発【主として授業研究部】

○教育課程の編成

- ・授業時数の設定
- ・モジュール授業の設定

○指導計画の策定

- ・使用教材の選定、教材の開発
- ・学年別目標、年間指導計画の策定
- ・振り返りカードの作成、評価方法の策定
- ・児童英検等、外部検定試験の計画、活用研修

○授業研究計画

- ・年間の研究授業等スケジュール作成

○教職員研修の計画

- ・小学校教員を対象とした研修を計画する

(5) 小・中・高等学校連携の基盤づくり【小中高地域連携部】

○小・中・高等学校10ヵ年間の俯瞰する学習到達目標の研究

- ・小・中・高等学校がつながる「雲南市『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標」の策定
- ・中1スタートプログラムの開発

○小・中・高等学校をつなげる指導案フォーマットの作成

- ・小・中・高等学校のつながりを明記した指導案作成

○小・中・高等学校交流の計画

- ・授業交流、授業研究会の実施計画作成

(6) 英語学習のモチベーションを向上させる環境整備【主として小中高地域連携部】

- 「さくら小中学生英語スピーチコンテスト」等各種英語スピーチコンテストの活用
 - ・小中学校の英語科年間指導計画への位置付け
- ICT活用研修
 - ・諸外国との交流等を実現するためのICT活用研修
- ALT活用研修
 - ・指導案の作成方法、打合せ方法についての研修
 - ・ALTへのティームティーチングのための日本語研修
- 地域教材の整備
 - ・英語による発信の素材となる地域教材等の整備、リスト化
 - ・ALTによる小学生用英語版地域教材の作成
 - ・地域教材の年間指導計画への位置付け
- 国際理解の取組の推進
 - ・ALT、CIRによる情報提供
 - ・米国インディアナ州リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道との交流事業
- 英語教育推進のPR活動
 - ・地元キャラクターを活用した英語教育推進のPR活動
 - ・雲南市ウェブサイトや通信発行等による保護者、地域への情報発信

(7) 研究成果普及のための基盤づくり

- 英語教育推進リーダーを活用した研修計画の策定
 - ・次年度以降の計画も含め、長期的な普及計画を策定する
- 研究成果の普及のためのウェブサイト開設
 - ・教材や年間計画等、研究成果物の積極的な提示

2 小学校

(1) 第3・4学年

- 週1コマの設定で外国語活動を開始する
 - ・Hi, friends! 1の前半の単元を中心に、学習活動を計画する
 - ・島根大学教育学部附属小学校及び広島大学附属小学校の教材を活用する
 - ・教職員研修を実施する
- 次年度に向けた年間35時間設定の年間指導計画及び評価規準等の策定
 - ・先進校及び広島大学附属小学校等の計画を参考に作成
- 指導教材の開発
 - ・地域教材の活用を計画する
 - ・教材のライブラリー化を図る
- 小小連携の推進
 - ・合同学習の実施
 - ・地域教材の活用

(2) 第5・6学年

- 学習指導要領に従って外国語活動を実施する
 - ・初年度は教科化に向けての準備とし、これまでの外国語活動を実施

○次年度の教科化へ向けた新教育課程の開発

- ・目標や指導内容の検討
- ・年間指導計画、評価規準の作成
- ・教材等の選定
- ・モジュール授業の計画
- ・文字の扱い方等、教科型の教育課程に向けた指導方法の研究

○小小連携の推進

- ・合同学習の実施
- ・地域教材の活用

3 中学校、高等学校

(1) 中学校

○小中高英語授業交流を実施

- ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動の授業を知る
- ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び次年度の指導方針の策定の支援
- ・小学校の英語指導カリキュラム編成への助言等

○中学校英語教育の高度化をめざした指導改善の計画

- ・英語による授業の推進
- ・小学校の英語教育を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の設定
- ・中1 スタートプログラムの計画

(2) 高等学校

○小中高英語授業交流を実施

- ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動の授業を知る
- ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び次年度の指導方針の策定の支援
- ・小学校の英語指導カリキュラム編成への助言等

○中学校の学習到達目標との連結

- ・中学校修了時の英語力を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の作成
- ・高等学校英語教育の高度化をめざしたカリキュラム策定方針の検討

<第2年次>

1 小学校

(1) 第3・4学年

○週1コマの外国語活動を実施

- ・新教材を使った担任による指導
- ・小小連携による合同学習での言語活動
- ・評価方法等についての検証
- ・教職員研修の実施

(2) 第5・6学年

○授業週1コマとモジュール1コマ分、計週2コマの英語科を開設

- ・新教材を使った担任による指導
- ・小小連携による合同学習での言語活動
- ・評価方法等についての検証

- ・教職員研修の実施

○モチベーション向上の取組を推進

- ・さくら小中学生英語スピーチコンテストへの参加
- ・ICTを活用した外国の児童との交流等

2 中学校、高等学校

(1) 中学校

○小中高英語授業交流を実施

- ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究
- ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び年間指導計画の検証

○中学校英語教育の高度化をめざした指導改善の計画

- ・英語による授業の推進
- ・小学校の英語教育を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の検証
- ・中1スタートプログラムの実施と検証及び次年度へ向けたプログラムの高度化

○モチベーション向上の取組を推進

- ・さくら小中学生英語スピーチコンテストへの参加
- ・ICTを活用した外国の生徒との交流等
- ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道との交流事業への参加

(2) 高等学校

○小中高英語授業交流を実施

- ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究
- ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び年間指導計画の検証

○中学校の学習到達目標との連結

- ・中学校修了時の英語力を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の検証

○モチベーション向上の取組を推進

- ・中・高等学校連携授業の計画
- ・ICTを活用した外国の生徒との交流等
- ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道との交流事業への参加

<第3年次>

1 小学校

(1) 第3・4学年

○授業週1コマとモジュール1コマ分、計週2コマの外国語活動を実施

- ・新教材を使った担任による指導
- ・小小連携による合同学習での言語活動
- ・教職員研修の実施

(2) 第5・6学年

○授業週1コマとモジュール1コマ分、計週2コマの英語科を実施

- ・新教材を使った担任による指導
- ・小小連携による合同学習での言語活動
- ・評価方法についての検証

- ・教職員研修の実施

○次年度に向けたカリキュラムの策定

- ・週2コマ+モジュール1コマの年間指導計画の策定

○モチベーション向上の取組を推進

- ・さくら小中学生英語スピーチコンテストへの参加
- ・ICTを活用した外国の児童との交流等
- ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道との交流事業への参加

2 中学校、高等学校

(1) 中学校

○小中高英語授業交流を実施

- ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究
- ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び年間指導計画の検証

○中学校英語教育の高度化をめざした指導改善の計画

- ・英語による授業の完全実施
- ・小学校の英語教育を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の検証と年間指導計画の再編成
- ・高度化された中1スタートプログラムの実施と検証
- ・教科書以外の副教材等を使った高度な英語授業の研究

○モチベーション向上の取組を推進

- ・さくら小中学生英語スピーチコンテストへの参加
- ・ICTを活用した外国の生徒との交流等
- ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道との交流事業への参加

(2) 高等学校

○小中高英語授業交流を実施

- ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究
- ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び年間指導計画の検証

○高度化した中学校の学習到達目標との連結

- ・中学校修了時の英語力を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の検証
- ・高1スタートプログラムの計画

○モチベーション向上の取組を推進

- ・中・高等学校連携授業の計画
- ・ICTを活用した外国の生徒との交流等
- ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道との交流事業への参加

<第4年次>

1 小学校

(1) 第3・4学年

○授業週1コマとモジュール1コマ分、計週2コマの外国語活動を実施

- ・新教材を使った担任による指導
- ・小小連携による合同学習での言語活動
- ・教職員研修の実施

(2) 第5・6学年

- 授業週2コマとモジュール1コマ分、計週3コマの英語科を実施
 - ・新教材を使った担任による指導
 - ・小小連携による合同学習での言語活動
 - ・評価方法についての検証
 - ・教職員研修の実施
- モチベーション向上の取組を推進
 - ・さくら小中学生英語スピーチコンテストへの参加
 - ・ICTを活用した外国の児童との交流等
 - ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道との交流事業への参加

2 中学校、高等学校

(1) 中学校

- 小中高英語授業交流を実施
 - ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究
 - ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び年間指導計画の検証
- 中学校英語教育の高度化をめざした指導改善の計画
 - ・英語による授業の完全実施
 - ・小学校の英語教育を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の検証
 - ・高度化された中1スタートプログラムの実施と検証
 - ・教科書以外の副教材等による指導を含めた年間指導計画の策定
- モチベーション向上の取組を推進
 - ・さくら小中学生英語スピーチコンテストへの参加
 - ・ICTを活用した外国の生徒との交流等
 - ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道との交流事業への参加

(2) 高等学校

- 小中高英語授業交流を実施
 - ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究
 - ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び年間指導計画の検証
- 高度化した中学校の学習到達目標との連結
 - ・中学校修了時の英語力を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の検証
 - ・高1スタートプログラムの実施及び検証
- モチベーション向上の取組を推進
 - ・中・高等学校連携授業の計画
 - ・ICTを活用した外国の生徒との交流等
 - ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道との交流事業への参加

II 平成26年度の進捗状況・課題

1 組織整備

本研究を推進するために、研究校4校で「吉田中学校区小・中・高等学校英語教育強化推進研究会」（以下、推進研究会という）を、次のように組織した。

- 構成員 小学校：全教職員
 中学校及び高等学校：管理職・研究担当者・外国語科教員
- 役員 会長：田井小学校長 副会長：吉田小学校長 吉田中学校長
- 部会と主な取組内容

- ① 授業研究部 部長 原 博子 教諭（吉田小）
- ・H26 実施分を基にした題材配列表（A B年度方式）の作成
 - ・各単元のゴールとなる言語活動の設定
 - ・小学校3年生のローマ字指導についての検討
- ② 教材研究部 部長 水 千映 教諭（田井小）
- ・英語を使ってふるさとについて考えたり発信したりするために適した地域教材の計画・作成
- ③ 小中高地域連携部 部長 伊藤善太郎 教諭（吉田中）
- ・英語学習のモチベーション向上のための連携や英語スピーチ大会等の活用
 - ・教職員研修の実施についての検討（合同研修会等）
 - ・「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の検討

推進研究会では、正副会長会で全体の方針を定め、推進研究会総会で共通理解を図り、各部会で具体的な研究を推進していく。平成26年度は、これまでに6回の会合を開催し（「5. 年間事業経過」参照）、次年度からの本格的実施に向けた計画が進められつつある。4月当初は事業に対する不安感や疑問も多く、県教育委員会の主導のもと進められていた感があったが、会合や研修会、先進校視察等を繰り返すうち、研究校の主体的な研究組織として活性化してきたと感じている。

また、推進研究会とは別に、雲南市のALT等による「ALT研究部」を組織した。島根県教育委員会の Prefectural Adviser を中心とし、運営指導委員の島根県立大学 Kane Eleanor 准教授の指導を仰ぎながら、主として次のような取組を計画した。

- 海外の絵本、テキスト等、指導に有効な教材等の収集、ライブラリー化
- 英語が苦手な担任のためのTT指導案の様式、打合せ方法の研究
- 担任とのTT研修等の計画

平成26年度は、中学校・高等学校はJETのALT、小学校においては民間のALTが授業を担当しており、ALT研究部としての取組は十分に行えていない状況である。民間のALTとJETのALTとの連携方法等についても検討していく必要がある。

2 環境整備

小学校第3学年からの外国語教育を推進していくため、各学校における学習環境の整備を行った。

(1) 教室環境整備について

各小学校において、本事業費等により、掲示物・参考資料・書籍・音声教材等の整備を行った。児童が英語を身近なものと感じるよう英語による表記を増やしたり、様々な英語の本・絵本・辞書を整備したりして、興味関心を広げることができるよう配慮した。

また、教員が指導したり研修したりするための資料や書籍等も整備し、授業の計画や研究がしやすい環境作りに努めた。

(2) 指導用教材の選定、作成について

① 通常の授業で使う教材について

小学校5・6年生については、平成26年度は外国語活動を行ったので、これまで通り「Hi, friends!」を使用した。小学校3・4年生の教材及び次年度以降の教科としての英語の教材の選定は大きな課題である。小学校3・4年生では、児童の発達段階を考慮しながら「Hi, friends!」の学習活動に変更を加えてオリジナルの単元として計画し、その記録を蓄積した。

その際、次の教材を参考とした。

- ・「ジュニアコロンブス21」（光村図書）
- ・「KIDS CROWN」（三省堂）
- ・「Good Friends」（島根大学教育学部附属小学校） 等

現在のところ、次年度以降の教材については、ある特定のものを使うのではなく、「Hi, friends!」を中心に、様々な教材から適切な活動を集めて、各単元で再構成しながら活用する予定である。

② 地域素材を取り入れたオリジナル教材の作成について

教材研究部では、地域素材を取り入れた言語活動のためのオリジナル教材を作成する計画で、現在その内容について検討しているところである。教材研究部で原案を作り、ALT研究部で必要な部分を英語化した後、次年度末までに印刷・製本する。

この教材は、単元末等の言語活動用教材として活用することをねらいとしたもので、来るべきグローバル社会で児童生徒がふるさと雲南について発信できるよう、地域にゆかりのある素材を取り上げる。1単元を1つの地域素材で構成し、各単元に小学校3年生から中学校3年生までの発達段階に応じた言語活動を複数収録して、6年間にわたって継続して活用することを想定している。

例えば「ヤマタノオロチ」の単元では、小学校3・4年生用ページで「おろち」のうろこの色を使った慣れ親しみの活動を設定し、小学校5・6年生用ページでは「スサノオノミコト」と「くしなだひめ」との会話を取り上げ、コミュニケーション活動に活用する。そして、中学校1・2年生のページでは「ヤマタノオロチ」について説明するための基礎的な英語表現を学習し、中学校3年生のページでは、自分の感想を付け加えるなどして、「ヤマタノオロチ」の神話についてスピーチを行う。

こうした学習を通し、自分の英語学習を振り返りながら自己の成長を実感することで、生涯にわたって外国語学習に関わっていこうとする意欲を高め、そして「ふるさとを愛し、その良さを広く世界に発信しようとする意欲」と英語力をもつ児童生徒の育成を図りたいと考えている。

3 先進的な取組の情報収集

(1) 先進地視察について

吉田小学校2名、田井小学校2名、吉田中学校1名で、平成26年12月に、香川県直島町立直島小学校及び徳島県鳴門市立林崎小学校を視察した。

小学校3・4年生での外国語活動については、それまでなかなか具体的なイメージを

もつことができず、めざすべき方向性が定まらない状態であった。しかしこの視察を通して、小学校3・4年生では、他の児童とのコミュニケーションにこだわるより、達成感や自己有用感を高める「自己完結型」の楽しいアクティビティーを中心としたほうが発達段階に適していること等を明確にすることができ、これから進むべき方向が明らかになってきたと感じた。

また、自分たちと同じように試行錯誤しながら取り組む教員の話や話を直接聞くことで、参加者の本研究に対するモチベーションも一層高まったように感じる。

そして、同じ研究に関わる教員同士が、学校や地域の枠を越えて語り合ったり情報交換したりすることで、同僚性や協働性、信頼関係を深めたことも大きな成果であった。

平成27年1月には各学校において視察報告会を開催し、2月には全小英研神奈川大会への視察を計画している。

(2) 諸外国の英語教育教材等の収集について

A L T 研究部の組織化を進めることができず、まだ具体的な取組を行っていない。県教育委員会の Prefectural Adviser を中心に、A L T のネットワークを活用して、近隣諸国の初等教育学校で活用されている英語指導教材・教具等について情報収集し、小学校で使えるものを取り入れたり、中学校の発展的な学習教材として活用したりしていきたいと考えている。

4 カリキュラム開発

(1) 目標と内容の設定について

本研究を進めるにあたって、そのよりどころとなる目標及び内容を次のように設定した。設定にあたっては、「英語教育の在り方に関する有識者会議」の報告「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」に示された「小・中・高を通じた目標及び内容の主なイメージ」を参照し、今後の研究を通して必要に応じて変更・修正していくこととした。小学校中学年においては、その発達段階を考慮し、コミュニケーション活動より「自己完結」的なアクティビティーを数多く取り入れることから、体験的な理解に係る内容を優先して記述した。

小学校 中学年 外国語活動

①目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声等に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

②内容

- 1 日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。
 - (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
 - (2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。
 - (3) 異なる文化をもつ人々との交流を体験し、文化等に対する理解を深めること。

2 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、次の事項について指導する。

- (1) 言葉を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。
- (2) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
- (3) 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。

小学校 高学年 外国語

① 教科の目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現を用いて話したり聞いたりするなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

② 英語の目標

- (1) 身近で簡単なことについて話される初歩的な英語を聞いて、話し手の意向などを理解できるようにする。
- (2) 身近で簡単なことについて、初歩的な英語を用いて自分の考え等を話すことができるようにする。
- (3) アルファベットや単語に慣れ親しみ、英語を読もうとする態度を育てる。
- (4) アルファベットを書くことに慣れ親しみ、英語を書こうとする態度を育てる。

③ 内容

(1) 言語活動

ア 聞くこと・話すこと

- ・基本的な英語の音声に慣れ、身の回りの語彙や場面の中での表現を聞き取り、状況から判断して適切に応じること
- ・自分の考えや気持ちなどを、英語やジェスチャーを使って、聞き手が分かるように話すこと

イ 読むこと・書くこと

- ・文字や符号を識別し、正しく読むこと
- ・単語や定型表現を識別すること
- ・文字を識別し、正しく書くこと
- ・単語や定型表現を識別し、正しく書き写すこと

小学校高学年の「③内容」の「(2) 言語活動の取扱い」以降については、現段階では定めていない。今後、これらの目標と内容の妥当性について研究を進めながら、具体的な内容を検討していく。

また、中学校及び高等学校の新たな目標等は、小学校の目標及び内容の妥当性を確認した後、平成27年度中に設定することとした。

(2) 教育課程の編成について

① 授業時数について

小学校での外国語活動の時間の増加については、各学年の週時数を1時間ずつ増加することで対応した。

小学校3・4年生では、週28時間を29時間に増加し、外国語活動35時間を確保した。

小学校5・6年生では、平成26年度は準備期間として、これまでの外国語活動を行ったため、時数の増加はない。平成27年度からは、小学校5・6年生についても週時数を1時間増加し週30時間とし、年間70時間の英語の時間を確保することとした。

当初、モジュールの時間を設定する予定であったが、授業として指導する方が指導計画や活動を組みやすく、また成果が上がりやすいと考え、平成27年度についてはモジュールを実施しないこととした。

② 指導計画の策定について

使用教材については、特定の教材を採用していないため、「Hi, friends!」を中心に様々な教材から活動を引用しながら進めている。

今年度は、小学校5・6年生ではこれまでの年間指導計画に沿って行い、小学校3・4年生では「Hi, friends!」の中から使えるものを抜き出し、新たな単元として設定して、その記録を蓄積した。

そして、授業を進めるのと並行して、次年度の各学年の単元配列を計画した。本地区拠点の小学校は、3・4年及び5・6年が複式学級で、異学年の児童が同一教材を使って一緒に学習するため、学年ごとに使用する通常の教科書や教材をそのまま使うことは難しく、複式学級に特化した特別な指導計画を設定することが必要である。

次年度以降の単元配列表は、別紙の通りである。この単元配列表は、いずれ作成する年間指導計画の原型となるもので、単元ごとの目標や言語材料などを記載した。この単元配列表を元に、各単元での具体的な言語活動を設定し単元計画を作成して、次年度からの年間指導計画を作成する予定である。

この単元配列表については、これまで活用してきた「Hi, friends!」や、様々な教材で扱われている言語材料を一覧にし、3・4年生で扱うものと5・6年生で扱うものとに分けた上で、児童の発達段階を考慮しながら配列したものである。同じ言語材料を繰り返し扱ったり、同じ言語材料でも活動の目標や評価規準を変えたりすることで、少人数の良さ等を生かした複式学級ならではの年間指導計画を作成したいと考えている。

単元配列を検討する中で課題として上がったのが、小学校3年生の国語で扱うローマ字の指導との関連についてである。次の2つのことについて様々な意見が出たが、最終的な結論には至っていない。

- ・3年生がローマ字を学習するまでに、アルファベットの大文字、小文字に慣れ親しんでおくべきかどうか。ローマ字学習の前にアルファベットに触れると、大文字・小文字の混乱が生じるのではないか。
- ・3年生が学習するローマ字は、訓令式が良いのかへボン式が良いのか。3年生の発達段階を考えると、規則性の明確な訓令式の方が学習しやすいが、英語の発音につなげることを考えるとへボン式の方が適切と考えることもできる。

③ 複式学級の指導について

異学年の学習集団がともに学ぶ複式学級は、とかくその短所ばかりが語られがちであるが、本研究では、複式学級のメリットを生かすことを意識して取り組んだ。

高学年の複式学級には、外国語活動をすでに1年間学習した6年生と、初めて英語と出会う5年生が混在し、1学期は音声、表現等の情報量に大きな差がある。このことは7月に実施した児童英検の結果からも明らかである。（（6）評価計画Ⅱ③英検による児童生徒の英語力の把握 参照）そのため、指導計画を策定するにあたっては、特に1学期の段階において、6年生のモチベーションを下げずに、初めて英語と出会う5年生に充分配慮した学習を進める工夫が重要になってくる。さらに、すでに1年間学習した6年生と、初めて学習する5年生の、学習への関わり方を変えたり、授業のねらいを2段階設定してそれぞれの発達段階に応じた学習活動にしたりすることが求められる。

複式学級の上学年の児童と下学年の児童の関係は、通常の学級の人間関係とは大きく異なる特徴を持っている。ペアに1枚プリントが配られれば、上学年の児童がそれをそっと下学年の児童の方に向けて置いてやる、下学年が質問すれば、それがどんな些細な質問であっても、からかったり笑ったりすることなく優しく教える、そして下学年の児童は、そんな上学年の児童に対して尊敬やあこがれの気持ちを持ち、だからこそ、何か分からないことがあれば、隠したり恥ずかしがったりすることなく素直に質問する。複式学級には、こうした「温かい縦社会」が存在する。

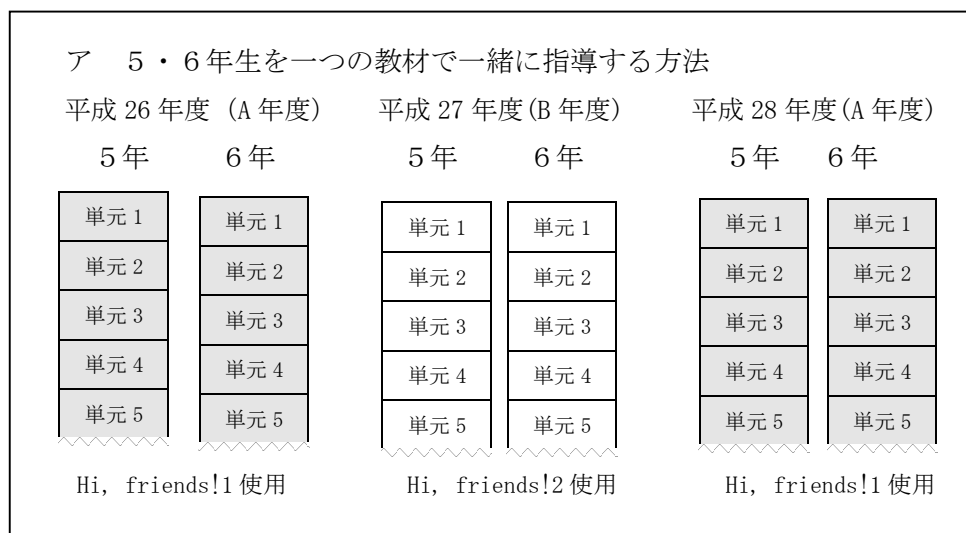
このような複式学級のメリットを生かした、授業における異学年の関わり方について研究を進めている。上学年が発話や活動のモデルとなって活躍できるよう、ペアの組み方やデモンストレーションの仕方を工夫したり、下学年の活動に対して上学年がアドバイスをしたりすることで、上学年の自信や自己有用感が高まることも期待できる。

現在、複式学級用の単元配列、年間指導計画案を作成し、それを検討している段階である。平成27年度からの単元配列表は、別紙の通りである。

複式学級の単元配列にあたっては、次の点を配慮した。

○2学年の教材の単元を組み替えたA・B年度方式で指導する。

A・B年度方式とは、複式学級で使われる教育課程の工夫で、「Hi, friends!」を例に挙げると、次の二つの方法が考えられる。（図の色掛け部分は「Hi, friends! 1」の単元を表している）



この方法では、通常の学級と同じ年間指導計画になるため、教員にとっては指導しやすい。しかし、5年生で初めて英語に触れるのにも関わらず、いきなり「Hi, friends! 2」を使って学習する年度(例では平成27年度)が生じるのが欠点である。

イ 2年間の単元を組み替えて指導する方法					
平成26年度(A年度)		平成27年度(B年度)		平成28年度(A年度)	
5年	6年	5年	6年	5年	6年
単元1	単元1	単元1	単元1	単元1	単元1
単元1	単元1	単元1	単元1	単元1	単元1
単元2	単元2	単元3	単元3	単元2	単元2
単元2	単元2	単元3	単元3	単元2	単元2
単元4	単元4	単元4	単元4	単元4	単元4
Hi, friends! 1・2使用		Hi, friends! 1・2使用		Hi, friends! 1・2使用	

これは、同じ学習集団に対して「Hi, friends! 1」と「Hi, friends! 2」の2冊を与え、2カ年の単元を組み替えて指導する方法である。この方法であれば、毎年4月は「Hi, friends! 1」で指導を始め、初めて英語に出会う5年生に配慮することが可能である。

A・B年度方式以外に、それぞれの学年が違う教科書・教材を使って、担任が2つの学年間を渡り歩きながら指導する方法(わたり方式)もあるが、コミュニケーション活動を多く取り入れる外国語活動には適していないと考えている。

本研究校の小学校では、上の「イ 2年間の単元を組み替えて指導する方法」を基本にして単元配列表を作成している。

- 1学期に特に下学年に配慮した指導、3学期に特に上学年に配慮した指導を行う。

下学年が初めて英語と出会う1学期は、特に配慮が必要な時期である。そこで、1学期の指導では、A年度・B年度ともに同じ単元を扱い、2カ年間でスパイラルな指導を心がけることとした。下学年に焦点を置いた指導をすれば、すでに経験している上学年にとっては不十分になることがある。そのため、同じ単元を2カ年繰り返し扱うが、上学年と下学年の学習活動の内容や活動への関わり方、役割分担を変えて、上学年の児童が発展的な学習ができるよう配慮する。

また、3学期は上学年の児童にとってはまとめの時期となり、それまでの学習を振り返りながら自己の成長を自覚し、自信や自己有用感を高め、次のステップへの意欲を育てる。特に6年生の3学期は、中学校への接続を意識しなければならない重要な時期である。そうした状況に配慮し、3学期の最後には、2年間の活動の総まとめができる単元を配置した。

- 目標、評価規準、言語活動への関わり方等を、学年ごとに設定する。

発達段階の違う異学年の児童が共存する複式学級での指導では、それぞれの学年の状況を個別に把握しながら進めていく必要がある。児童の活動だけを見れば、上学年も下学年もあまり変わることなく活動しているようだが、学習経験や発達段階による

様々な差があり、それらを意識しないで指導すると、特に下学年の学習意欲を低下させてしまう恐れがあること等を十分に考えておかなければならない。

そこで、単元配列表・年間指導計画を作成する際には、1つの単元に2つの学習の目標、評価規準を設定したり、言語活動への関わり方を上学年と下学年で変えたりする工夫を取り入れた。これにより、複式学級の温かい人間関係を生かした学習活動が可能になると考えている。

○必然性のあるコミュニケーション活動を設定する。

複式学級の児童は、小さい頃から同じ集団の中で育ってきたため、家族のようにお互いのことをよく知っている。そうした小集団でコミュニケーションギャップのある言語活動を設定するのは容易ではない。もう知っていることを質問したり話したりしても、それは必然性のある言語活動とはなりにくい。また、こうした中山間地の小規模校では、級友以外の人と関わる機会も極めて少ない。

そこで、様々な方法で、級友以外の人と英語を使った交流場面を設定した。

- ・吉田小学校、田井小学校の合同学習
- ・外国語活動への他の教職員の参加
- ・外国語活動への保護者、地域住民の参加
- ・ALTとの1対1の関わりを設定した学習
- ・情報端末による外国の児童との交流（計画段階）

こうした取組を通し、児童は様々な人と関わることの楽しさを感じており、話そうとする意欲も高まった。研究授業等で外部から参観者があると、児童は進んで話しに行こうとするようになった。

○下学年の発展的学習として捉える。

下学年の児童にとって、同じ単元を上学年と一緒に学習することは、決して容易なことではない。教員はそのために、下学年に対して様々な支援を行うが、こうした状況をデメリットと捉えず、下学年の発展的な学習、チャレンジ精神を高める機会であると捉えることも大切であると考えている。

④ 評価について

評価については、まだ十分な研究が行えていない。5・6年生の単元配列表には、1つの単元に2つの評価規準を設定した。これは、発達段階の違う5年生と6年生を、違う評価規準で評価し、それぞれの学年にあった方法で支援することで、学習意欲を高めるよう配慮したいと考えたからである。これについては、さらに研究を重ねて検討する必要がある。

振り返りカードは、現段階では、1単元の授業を1枚のカードにまとめたものを基本として活用しているが、次年度に向けて、「イングリッシュ・パスポート」という振り返りのための自作教材の作成も案として出ているところである。この「イングリッシュ・パスポート」は、児童一人一人が持つ「英語学習手帳」で、中学年用と高学年用を想定している。中学年・高学年のそれぞれ2年間でどんなことを学ぶかが分かる一種の「CAN-DO リスト」としても活用できるよう作成する。授業を終えるたびにそのパスポートを使って振り返り、最終的には自分だけの「イングリッシュ・パスポート」が完成

する。高学年では、自分たちが学習した言語材料のリスト等も掲載し、前述の地域素材を扱うオリジナル教材での言語活動等に活用できるよう工夫することも可能である。

5 英語コーディネータの役割

(1) 「専科」から「英語コーディネータ」へ

本地域拠点には、小学校2校を兼任する英語免許を持った教員が1名配置されており、本事業の推進にあたっている。4月から「専科教員」という呼び方をしてきたが、12月以降は「英語コーディネータ」という名称に変更した。

小学校における英語教育は、指導者が小学校文化を十分に理解・熟知し、一人一人の児童理解の上に行われるものでなければならない。そうしたことを考え、本地域拠点では、小学校3・4年生においても、教科化する5・6年生においても、学級担任による指導を基本として研究していくこととした。「専科教員」というと、音楽や図工のようにその教科を一人で指導する教員を連想し、「専科教員」が単独で英語を教える印象を与えてしまう。それは、担任を中心とした指導を行うという本研究の主旨に合致しない。そこで「専科教員」という呼び方をやめ、担任と一緒に授業を作っていく役割であることを強調する意図で、「英語コーディネータ」とした。

(2) 「フェードアウト型連携」について

研究校である小学校に、それまで外国語活動の指導経験が無かった担任もいたため、年度当初は、英語コーディネータが中心となって指導案を作成したり、教材を作ったりすることが多かった。また、授業でも英語コーディネータが中心に指導することが多かった。ところが研究が進むにつれ、実践や研修等を通し、担任の意識、授業力、指導案等を作る力が大きく向上したため、英語コーディネータの仕事は4月と比較すると大幅に減った。

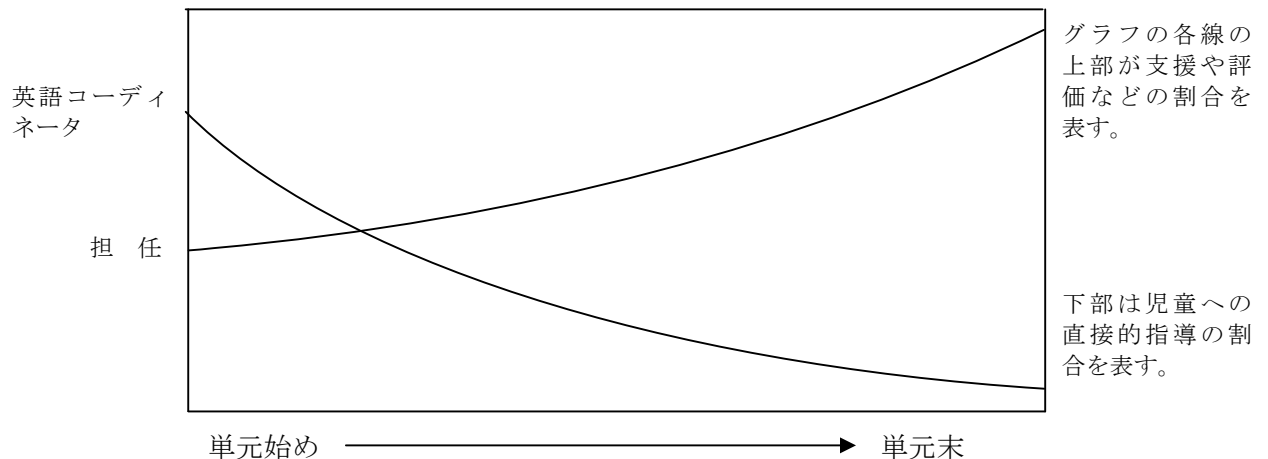
研究会で、ある単元末の授業を行ったとき、英語コーディネータが「もう今日の授業では私は何もすることがなかった。あれで良かったのでしょうか。」といった意味の質問をしたことがある。一緒に授業の計画をしたが、授業はすべて担任が行い、自分の出番がなかったという。その時、「それが理想の関わり方なのではないか。」という意見が出て、皆が納得した。

英語コーディネータは、1つの単元の中で「フェードアウト」していくかのように、徐々に授業への関わりを減らしていくべきではないかと考えている。単元に入る前に、単元計画を作成する際のポイントを押さえたり、教材を作る際のアドバイスをしたりするのも重要な仕事である。単元の始めの段階では、気付きや慣れ親しみのために、児童に対してたくさんの英語を与えるのは英語コーディネータの役割である。ALTとのデモンストレーションを通して、児童に英語を聞かせる。必要に応じて専門的な指導をする場面もあるであろう。そして正しい発音の英語にたくさん慣れ親しませ、その間、担任は英語学習のモデルとしての役割等を通し、児童との関わりを徐々に増やしていく。単元の後半部分は、デモンストレーションも担任が行い、英語コーディネータは担任が支持する支援を中心に行うことになる。

本地域拠点では、英語コーディネータのこのような関わり方を、「フェードアウト型連携」と名付けた。単元が進むにつれ、授業への関わりはフェードアウトしていくが、その一方で、評価に関しての関わりが「フェードイン」していく特徴もある。単元末の活動では、直接指導することは少なくなるが、そのかわりに児童の学習状況をしっかりと見取り、その情報を担任に伝えることが求められる。

また、年間を通じた関わり方や1単位時間の中での関わり方についても同様のことが言える。4月当初、英語コーディネータが中心となり両校で使える教材を作成したり、指導案を作ったりしていたが、その役割が、今ではかなり担任の役割にシフトしてきた。

担任と英語コーディネータの授業における直接的指導と支援・評価等の割合の変化のイメージ



6 授業研究及び教職員研修の計画について

本地域拠点の小学校は複式学級の学校であることから、担任の数は各学校に3～4名しかいない。(特別支援学級担任を除く。)同学年を担当する担任同士が相談しながら授業を進めることは不可能で、担任個々の指導力が極めて重要であると言える。従って、授業研究等の研修は重要であり、教員がお互いの授業を公開するなどして研鑽する機会を定期的に設定した。これまでに行った研修・研究会は次のとおりである。

- ・ 6月 5日：外国語活動指導研修【指導助言：琉球大学 大城賢教授】
- ・ 6月 23日：授業研究会【指導助言：出雲教育事務所 北川宏己指導主事】
- ・ 7月 1日：合同授業（吉田小・田井小）
- ・ 7月 31日：小学校外国語活動教育講座（浜田教育センター）
- ・ 8月 29日：研修会【講師：県教育センター 今田・鎌田指導主事】
- ・ 9月 18日：雲南市教育委員会学校訪問（授業公開・取組概要説明）
- ・ 9月 12日：中・高等学校英語科教育講座（教育センター）
- ・ 10月 3日：英語指導力向上研修（教育センター）
- ・ 10月 20日：小学校外国語活動研修会【指導・講演：直山木綿子 教科調査官】
- ・ 11月 8日：雲南市教育フェスタ授業公開（田井小学校）
- ・ 11月 26日：授業研究会（吉田小学校）
- ・ 12月 4日：市教研英語部会授業研究会【指導助言：出雲教育事務所 北川宏己指導主事】

4月当初、この研究が始まったとき、初めて外国語活動の授業を行う担任も数名いたが、早い段階から積極的に研修会や公開授業を行ったり、外国語活動経験者が模範授業を提供したりすることで、担任の指導力は大幅に向上した。お互いの授業を見合うことについて抵抗がなくなり、大変熱心に授業改善に取り組んでいる。

また多忙な中での研修会・公開授業の開催やその充実については、各学校の管理職のリーダーシップによるところが大きく、本拠点地域の教員の授業力の高さは、各校の管理職の意識の高さと相関しているとも言える。上記研修・研究会の他にも、県内外の各種研修・研究会に主体的に参加するなど、非常に熱心に取り組んでいる。

今後は、教員の英語力向上のための研修等も望まれる。ALTの協力を得ながら、担任の英語力も少しずつ高めていきたい。

7 小・中・高等学校連携の基盤づくり

(1) 小学校から高等学校までを俯瞰する学習到達目標の研究について

本研究では、小学校から高等学校までをつなぐ「雲南市『CAN-DO リスト』」の形での学習到達目標を作成することとしている。現段階では、小学校では完成しておらず、今後、次のような流れで作成する予定である。

①中学校、高等学校の「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を見直し、修正する。

(平成 26 年度)

- ・まずは、小中高の接続をあまり意識せず、それぞれの学校での授業改善をねらいとし、現行の学習指導要領に準じて各学年の能力記述文を精査、修正する。
- ・吉田中学校では、平成 26 年 6 月に作成したものを再検討し、作成し直した。
- ・三刀屋高等学校では、今年度初めて作成したが、その内容については今後再検討することとしている。
- ・現段階のものを資料として添付した。

②参考資料「小・中・高等学校をつなぐ『CAN-DO リスト』」の形での学習到達目標

(樋口, 加賀田, 泉, 2012) を元に、小・中・高等学校をつなぐ能力記述文を検討する。(平成 26 年度～平成 27 年度：小中高地域連携部)

- ・参考資料を土台にして、小・中・高等学校をつなぐ能力記述文の大枠を作成する。
- ・それを元に、すでに作成している吉田中学校、三刀屋高等学校の「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の能力記述文を再検討し、整合性を調整する。
- ・小学校 5・6 年生の外国語の年間指導計画及び評価規準の策定と並行して、小学校の教科化に伴う、中学校の能力記述文の高度化について検討する。
- ・小学校の「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の能力記述文を作成する。

③中学校、高等学校で、高度化のための具体的な単元修正を行う。(平成 27 年度～平成 28 年度：授業研究部)

- ・中学校、高等学校の能力記述文の高度化した部分を具体的に検討し、必要に応じて単元の追加、変更等を行う。
- ・中学校における「中 1 スタートプログラム」を検討する。

(2) 小・中・高等学校をつなげる指導案フォーマットの作成について

次年度以降、小・中・高等学校をつなぐ「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を設定していくための準備として、学習指導案の形式を全ての研究校で統一することとした。これまで小・中・高等学校の学習指導案の形式は大きく異なっていたが、異校種間で連携しながら英語の教育課程をつないでいくためには、研究授業等を行う際の視点等をそろえておく必要があることから、次のような様式で作成することとした。

〇〇立〇〇〇学校 第〇学年 外国語科（活動）学習指導案																			
		日 時 平成 27 年〇月〇日（木）〇校時																	
		場 所 〇年〇組教室																	
		指導者 教 諭 〇 〇 〇																	
		ALT 〇 〇 〇																	
<p>1 単元名</p> <p>2 単元目標</p> <p>3 単元の評価規準</p> <p style="margin-left: 20px;">(1) 評価規準</p> <p style="margin-left: 20px;">(2) 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標との関連（今年度は中・高等学校のみ）</p> <p style="margin-left: 20px;">【第〇学年】</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-left: 40px;"> <thead> <tr> <th style="width: 25%;">話すこと</th> <th style="width: 25%;">書くこと</th> <th style="width: 25%;">聞くこと</th> <th style="width: 25%;">読むこと</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①.....</td> <td>①.....</td> <td>①.....</td> <td>①.....</td> </tr> <tr> <td>②.....</td> <td>②.....</td> <td>②.....</td> <td>②.....</td> </tr> <tr> <td>③.....</td> <td>③.....</td> <td>③.....</td> <td>③.....</td> </tr> </tbody> </table>				話すこと	書くこと	聞くこと	読むこと	①.....	①.....	①.....	①.....	②.....	②.....	②.....	②.....	③.....	③.....	③.....	③.....
話すこと	書くこと	聞くこと	読むこと																
①.....	①.....	①.....	①.....																
②.....	②.....	②.....	②.....																
③.....	③.....	③.....	③.....																
<p>4 学習の基盤</p> <p style="margin-left: 20px;">(1) 単元観</p> <p style="margin-left: 20px;">(2) 生徒（児童）観</p> <p style="margin-left: 20px;">(3) 指導観</p> <p style="margin-left: 20px;">(4) 小学校（中学校）外国語活動（外国語科）との関連</p> <p>5 単元の指導計画</p> <p>6 本時の学習</p> <p style="margin-left: 20px;">(1) ねらい</p> <p style="margin-left: 20px;">(2) 準備物</p> <p style="margin-left: 20px;">(3) 展 開</p> <p style="margin-left: 20px;">(4) 本時の評価（中・高等学校のみ。小学校では書かず、次の（5）が（4）になる。）</p> <p style="margin-left: 20px;">(5) 授業研究の視点</p>																			

この指導案形式の特徴の一つは、単元の評価規準に「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標との関連を入れたことである。今年度は中学校、高等学校のみであるが、次年度以降は、小・中・高等学校をつなぐ共通した「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標に基づいて、小学校の指導案にも記載することになる。

8 英語学習のモチベーションを向上させる取組

(1) 「さくら小中学生英語スピーチコンテスト」等各種英語スピーチコンテストの活用について

小中学生の英語学習に対するモチベーションを向上させる取組として、各種英語コンテストを活用した。雲南市では、6年前から市内の小中学生を対象とした「さくら小中学生英語スピーチコンテスト」を毎年開催している。雲南市にゆかりのある事柄についての英文原稿が準備されており、参加者は自分が選んだ英文を覚え、その内容についての感想やコメントを付け加えて発表する。今年は10月19日に開催され、小学生は低学年から高学年まで20名、中学生7名の参加があった。研究校からは小学生が4名、中

学生が6名参加し、小学生1名が3位入賞、中学生2名がそれぞれ2位、3位に入賞した。参加者はみな来年も参加したいと話しており、英語学習への意欲はさらに高まったと言える。

中学生は、この「さくら小中学生英語スピーチコンテスト」の他に、出雲北陵高校「英語レシテーションコンテスト」や出雲市が開催している「サンタクララ市長杯英語スピーチコンテスト」にも参加している。

次年度以降は、これらのコンテストを年間指導計画に関連づけ、さらに効果的に活用していくこととしている。

(2) ICT活用について

地域拠点の小中学校はいずれも極小規模の学校で、全校児童生徒数はいずれも30名前後である。学級は少人数で、家庭的な温かい雰囲気の中、きめ細かい指導が可能である反面、人間関係が限られていることから、コミュニケーション活動を行う上では制約がある。幼い頃から同一集団で生活をしており、全てを知り合っている兄弟姉妹のような関係であるため、コミュニケーション活動を行う際の必然性やコミュニケーションギャップの設定に苦慮する。

そうしたデメリットを解消し、様々な交流活動を実現する方法として、ICTの活用を計画した。雲南市は、平成26年12月末までに、全ての学校で無線LANが使える環境を整備しており、情報端末を使った他校や海外の学校との交流も可能となった。現段階ではICTによる交流は未実施であるが、今後、情報端末を活用して他校や外国の児童生徒との交流につなげていきたい。

また、様々な外国の情報を授業で手軽に活用する上でも、ICTの活用価値は高い。例えば「Turn right. / Turn left.」を使って道案内をする際に、絵に描いた地図上で活動しようとする、児童は右左の感覚が混乱し、うまくいかないことが多い。しかし、インターネットを使った地図ソフトで電子ボード上にストリートビューを表示し、画面の右側・左側をタッチすれば、まるで実際に外国の町を歩いているかのような感覚で、右に曲がったり左に曲がったりすることが可能である。児童は外国を身近に感じ、外国に行ってみたいという気持ちが英語学習に対する意欲の向上にもつながる。

(3) ALT活用研修について

今年度はALT活用研修を行うことができなかったが、英語コーディネータを中心として、授業の前に必ず打合せの時間を設けることで、ALTの活用が効果的に行えたと考えている。

今後はALT研究部を活用し、指導案の作成方法、打合せ方法についての研修や、チームティーチングのための英語・日本語研修等も計画する。

(4) 国際理解の取組の推進

雲南市は、米国インディアナ州リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道郡との交流事業として、中高生を対象とした「リッチモンドサマースクール」や「清道郡青少年相互交流事業」等を開催している。こうした交流を小・中・高等学校の英語の授業に関連させ

ることで、国際理解の推進や英語学習への動機付けにつなげていく。

吉田中学校では、交流先のリッチモンド市や清道郡の学校の教員によるビデオレターを授業で活用するなどした。

(6) 評価計画（平成 26 年度の進捗状況・課題）

I 評価計画

<第1年次>

- (1) 児童生徒への意識調査の定量的分析
 - ・意識調査の作成
 - ・比較データ収集のための調査実施（2学期始め及び3学期末）
- (2) 学校評価の活用による指導者、保護者、地域の意識等の把握
 - ・学校評価への調査項目の設定
 - ・比較データ収集のための調査実施
- (3) 運営指導委員による評価
 - ・評価項目の設定
- (4) 児童英検学校版、英語検定等の外部検定試験を活用した児童生徒の英語力の状況
 - ・実施計画の策定
- (5) スピーチコンテスト、国際交流事業等への参加状況
 - ・実施計画の策定

<第2年次>

- (1) 児童生徒への意識調査の定量的分析
 - ・1学期末及び3学期末に実施
- (2) 学校評価の活用による指導者、保護者、地域の意識等の把握
 - ・各学期実施
- (3) 運営指導委員による評価
 - ・第3回運営指導委員会で協議
- (4) 児童英検学校版、英語検定等の外部検定試験を活用した児童生徒の英語力の状況
 - ・第5、6学年及び希望者を対象に年間1回実施
- (5) スピーチコンテスト、国際交流事業等への参加状況
 - ・参加状況の記録及び映像資料作成

<第3年次>

- (1) 児童生徒への意識調査の定量的分析
 - ・1学期末及び3学期末に実施
- (2) 学校評価の活用による指導者、保護者、地域の意識等の把握
 - ・各学期実施
- (3) 運営指導委員による評価
 - ・第3回運営指導委員会で協議
- (4) 児童英検学校版、英語検定等の外部検定試験を活用した児童生徒の英語力の状況
 - ・第5、6学年及び希望者を対象に年間1回実施
- (5) スピーチコンテスト、国際交流事業等への参加状況

- ・参加状況の記録及び映像資料作成
- (6) 中学校における島根県学力調査の結果分析
 - ・中1及び中2の状況について把握・分析
- <第4年次>
 - (1) 児童生徒への意識調査の定量的分析
 - ・1学期末及び3学期末に実施
 - (2) 学校評価の活用による指導者、保護者、地域の意識等の把握
 - ・各学期実施
 - (3) 運営指導委員による評価
 - ・第3回運営指導委員会で協議
 - (4) 児童英検学校版、英語検定等の外部検定試験を活用した児童生徒の英語力の状況
 - ・第5、6学年及び希望者を対象に年間2回実施
 - (5) スピーチコンテスト、国際交流事業等への参加状況
 - ・参加状況の記録及び映像資料作成
 - (6) 中学校における島根県学力調査の結果分析
 - ・中1～中3の状況について把握・分析

II 平成26年度の進捗状況・課題

平成26年度は準備期間として捉えており、次年度からの研究の基盤を整えることが中心となったため、今年度の評価については、現段階では十分に把握していない。

次のような方法で、今年度末までに現状について把握する予定である。

① 児童生徒への意識調査の実施

- ・この1年間外国語に関わった児童の意識の変容を検証する。児童英検（ブロンズ）に附属する意識調査を活用し、7月実施分と2月実施分を比較検討する予定である。

② 運営指導委員による評価

- ・年度経過報告書により取組内容等への意見、コメント等を収集し、次年度の計画に生かす。

③ 英検による児童生徒の英語力の把握

- ・小学校は児童英検、中学校は英検、高等学校はGTECを使い、変容を確認する。両小学校で7月に実施した児童英検（ブロンズ）の結果概要は次のとおりである。

○分野別平均正答率（小3～小6）

語句：73% 会話：67% 文章：68%

○学習経験年数別の総合平均正答率

学習経験0～6ヶ月 : 66.0% 学習経験2年～3年 : 90.5%

学習経験6ヶ月～1年 : 71.0% 学習経験4年以上 : 95.0%

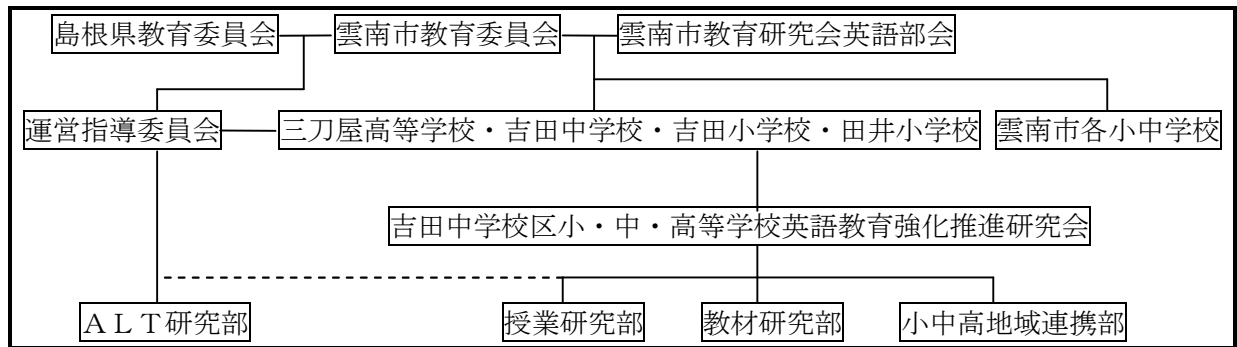
学習経験1年～2年 : 77.5%

④ スピーチコンテスト、国際交流事業等への参加状況の把握

- ・今年度の結果を、来年度以降の状況と比較しながら、経年的に多くの児童生徒が取り組むことができるよう指導していく。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要（平成 26 年度の進捗状況・課題）



推進研究会については、研究校の各部長を中心にして主体的な活動が行われるようになった。これまででも正副会長会、部長会、総会、部会など回数を重ねてきており、研究推進に係る様々な意見が出されている。

しかし今年度については、雲南市教育研究会英語部会との関わりはほとんど無く、1回の研究会を開催したにとどまった。事業成果を市内に広めるためにも、雲南市教育研究会英語部会との連携は強化していくべきだと考えている。

(2) 運営指導委員会

活動計画（平成 26 年度の進捗状況・課題）

I 活動計画

1 運営指導委員会

- 年間 3 回開催。
- ウェブ会議システムを導入し、必要に応じて拠点校の計画について相談や協議ができる体制を整備する。
- 事業実施計画に対する具体的な指導助言を行う。
- 拠点校における授業研究協議会を兼ねる。

2 雲南市教育研究会英語部会

- 拠点地域を含む雲南市全体のグローバル教育に係る施策等についての協議会。
- 雲南市、雲南市教育委員会、各小中学校担当で組織。
- 年 2～3 回程度実施。
- 拠点地域での研究を踏まえながら、「さくら小中学生英語スピーチコンテスト」や「米国リッチモンド市との交流事業」等の計画について検討し、そうした活動を通して、市全体へ拠点地域での研究成果を普及する。

3 吉田中学校区小・中・高等学校英語教育強化推進研究会

- 吉田中学校及び校区の 2 小学校の教職員並びに大東高等学校の英語科担当で組織する。
- 授業研究部、教材研究部、小中高地域連携部及び ALT 研究部の 4 つの研究部を置き、それぞれの実施計画に基づき研究を推進する。
- 初年度は月に 1 回の実施（部会ごと）を目標として取り組む。

4 ALT 研究部による ALT の積極的活用

- 島根県教育委員会の Prefectural Adviser を中心に、雲南市の JET-ALT を組織化し、

運営指導委員でALT経験者である島根県立大学准教授の指導助言を受けながら、小学校教員との連携の仕方や教材開発、情報収集及びTTのための日本語研修等を行う。

II 平成 26 年度の進捗状況・課題

運営指導委員会については、研究の方針等の策定が遅れたため、実施も遅くなった。委員会では、研究計画の説明に対して様々な意見をいただいた。評価について「子供のスキル自体を評価するのではなく、子供自身が自分のスキルが身に付いてきているとメタ認知できる評価の工夫をするべきでは」といった意見もいただき、小学校5・6年生の評価について検討する際の参考となった。

5. 年間事業経過

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	<ul style="list-style-type: none"> 管理職等への説明 研究計画立案 	運営指導委員への研究計画概要説明
5月	27日：文部科学省事業説明会	
6月	5日：吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会（総会） 5日：外国語活動指導研修（田井小・吉田小：授業公開・研修会【指導助言：琉球大学 大城賢教授】） 23日：授業研究会（吉田小学校【指導助言：出雲教育事務所 北川宏己指導主事】）	運営指導委員委嘱
7月	1日：合同授業（吉田小・田井小の5・6年生） 3日：吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会（正副会長会） 17日：児童英検実施（吉田小・田井小3～6年） 31日：小学校外国語活動教育講座（教育センター）	運営指導委員への研究計画概要説明
8月	29日：研修会（吉田小学校【講師：県教育センター 今田・鎌田指導主事】）	
9月	12日：吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会（小学校担当者会） 18日：雲南市教育委員会学校訪問（授業公開・取組概要説明） 12日：中・高等学校英語科教育講座（教育センター）	
10月	1日：吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会（正副会長・部長会） 3日：英語指導力向上研修（教育センター） 3日：島根県英語弁論大会（中学校1名出場：奨励賞受賞） 11日：英語検定（中学校1、2年） 19日：さくら小中学生英語スピーチコンテスト（小学生4名、中学生6名出場：小学生3位入賞、中学生2位、3位入賞）	8日：第1回運営指導委員会

	20日：小学校外国語活動研修会（授業公開・研修会【指導・講演：文部科学省 直山木綿子 教科調査官】）	
11月	2日：サンタクララ市長杯英語スピーチコンテスト（中学生1名出場） 8日：雲南市教育フェスタ授業公開（田井小学校） 8日：出雲北陵高校英語レシテーションコンテスト（中学生3名出場：優秀賞受賞） 10日：吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会（総会） 26日：授業研究会（吉田小学校：5・6年授業） 13日・14日：外国語指導助手の指導力等向上研修（教育指導課）	
12月	4日：市教研英語部会授業研究会（木次中学校）【指導助言 出雲教育事務所 北川宏己指導主事】 11日・12日：先進校視察（香川県直島町立直島小・徳島県鳴門市立林崎小）	
1月	6日：吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会（総会・部会） 15日・16日：実地調査【指導：文部科学省 直山木綿子 教科調査官】 22日：英語検定（中学校1～3年生） 29日：文部科学省全国連絡協議会 29日：雲南市英語コンテスト（中学校） ・先進地視察報告会（実施日未定）	15日・16日：実地調査
2月	・吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会（部会・正副会長会・部長会）（実施日未定） ・児童英検実施（吉田小・田井小3～6年）（実施日未定） 12日：合同授業（吉田小・田井小・吉田中） 13日・14日：先進校視察（横浜：全小英研神奈川大会参加）	
3月	20日：吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会（教材研究部会）	第2回運営指導委員会（予定）
【その他の取組】		

<本事業担当連絡先>

都道府県教育委員会等名	島根県教育委員会 教育指導課 担当（渡部）
連絡先（電話番号）	代表：0852-22-5419 直通：0852-22-5421
（電子メール）	E-mail：watanabe-masashi@pref.shimane.lg.jp